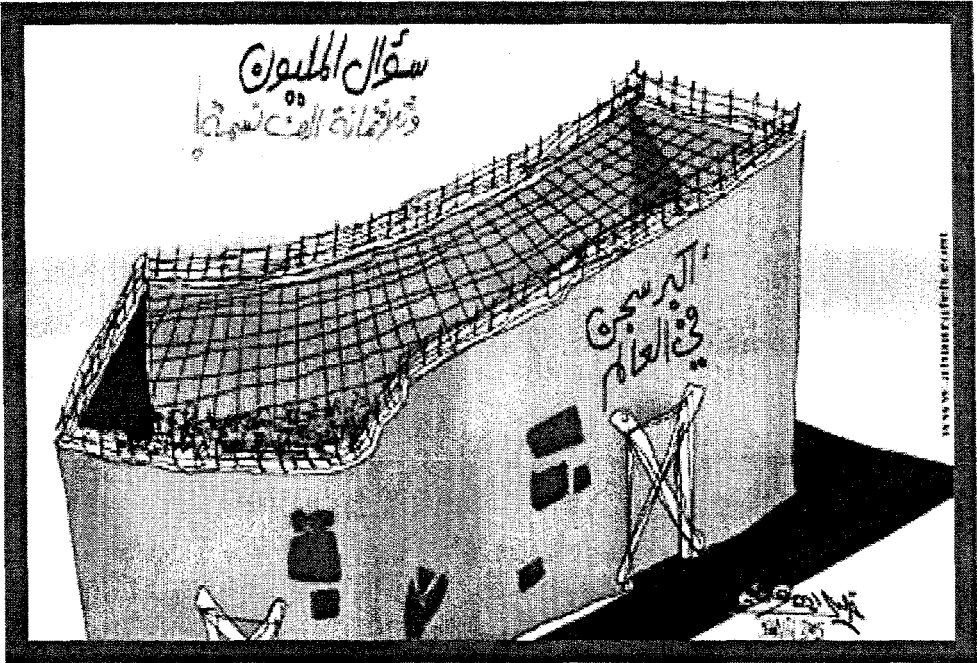


【月刊】

# キャッチピース

# 128

通巻 205 号  
05/08/20



イスラエル撤収後のガザ回廊は世界最大の監獄だ。

Khalil Abu Arafah, Alquads 08.24.2005

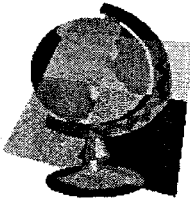
## 巻頭言

高速道路の料金所を出た大型トラックが急にUターン。直進してきた乗用車と衝突。さぞかし、乗用車の運転手はびっくりしたことでしょう。もっとびっくりすることには、この大型トラックはこういうUターンをよくやるらしい。別の日の朝、通勤の車が集まる駐車場で、耳をつんざく爆発音が三十数回。そして大量の白煙、前が見えない。耳鳴りのする人が沢山いた。そしてまた、住宅地のそばで、住宅地をすっぽりおおう射程距離のライフルが発射されている。発射音をするたびに、住民は自分を狙っているのではと身がすくむ。

これも、あれも米軍の訓練、やめてほしいと言えないのだとか。いや、むしろ、戦闘の訓練だから当然のことだとか。そのように日本政府の関係者は言う。これらすべて、八月の沖縄でおきたこと。

No war, no occupation!

## لا الحرب، لا الاحتلال!



2009年8月

- 良いところなど、一つもない … 田巻 一彦
- ミサイル防衛を止めよう
- 戦後60年の年に(下) … 木元 茂夫
- オキナワから トウキョウから … 太田 武二
- 沖縄の一ヶ月 … 皆川みずゑ

編集発行人 ● 脱軍備ネットワーク・キャッチピース

● 維持会員 (月額) 個人 1口 1000円 団体 1口 2000円 ● 参加会員 (月額) 個人 1口 500円 団体 1口 1000円  
● 通信会員 (年額) 1口 3000円 (会費には本紙購読料が含まれます)

## ミサイル防衛「初期配備」

2002年12月17日のブッシュ米大統領の「大統領はミサイル防衛能力の前進を発表する」と題された大統領声明は、ミサイル防衛の「初期配備」の号令だった。

1) 陸上配備型中間飛行段階迎撃ミサイル能力:大陸間弾道ミサイル(ICBM)を中間飛行段階で迎撃することを目的とする。20基をアラスカ州フォート・グリーリー(16基)とカリフォルニア州バンデンバーグ(4基)の両空軍基地に配備する。

2) 海上配備型中間飛行段階迎撃ミサイル能力:短距離及び中距離弾道ミサイルを迎撃するために、米海軍のイージス艦に20基まで搭載する。後で述べる日本のMD計画に関連が深い。

3) 最新型パトリオット能力(PAC-3):短距離及び中距離弾道ミサイルを迎撃する陸上配備システム。空輸で移動も可能。これも日本のMD計画と関連が深い。

2005年3月15日、ヘンリー・A・オベリング三世MDA長官は、下院軍事委員会戦略軍小委員で「初期配備の順調に達成されつつある」と証言した。

## 日本のミサイル防衛(1):共同研究

日本のミサイル防衛プログラムには、二つの流れがある。ひとつは「日米共同技術<研究>から<開発>へ」というライン。もう一つは、「米国製システムの導入(購入)」である。

まず、日米共同技術研究の経過と現状から。1998年12月、北朝鮮のテポドンミサイル発射を口実に、日米政府は、海上配備型上層システム(前出「海上配備型中間飛行段階防衛システム」のこと)「共同技術研究」の開始を合意した。研究目標は、海上発射型迎撃ミサイルSM-3の長射程化と高精度化であり、日本は、弾道ミサイルを追尾する赤外線シーカー(センサー)、赤外線シーカーなどを保護するノーズコーン、第2弾ロケットモーター、キネティック弾頭の四分野を担当している。

共同「研究」開始から六年を経とうとしていた2005年3月、日米両政府は、日本が提供するノーズコーンを搭載したSM-3を用いて、05年9月と06年2月に二度の共同飛行実験をハワイで行うことを合意した。同時に、前記四つの研究項目に加えて、イージス艦のレーダーや戦闘指揮システムの能力強化を共同技術研究の範囲に加えることを決定した。

## MDを「武器輸出三原則」の枠外に

ところが、このように飛行実験を含む開発段階以降に進むためには、日本政府が憲法の下で公言してきた平和政策の一つである「武器輸出三原則」が障害となる。

1983年1月14日の内閣官房長官談話は、「米国政府から日米間の防衛分野における技術の相互交流の要請があった」として、「相互交流の一環として米国に武器技術を

# 良いところなど、一つもない ミサイル防衛を止めよう

田 巻 一 彦

(キャッチピース運営委員・ピースデポ副代表)

6月17日、横須賀にミサイル駆逐艦「ステザム」が配備された。昨年10月1日に配備されたミサイル駆逐艦「フィッツジェラルド」と同じく、「ステザム」は弾道ミサイル監視能力を持った最新鋭のイージス艦として六隻目の横須賀母港艦船となる。9月には、七隻目のミサイル駆逐艦「ラーセン」がこれに加わり、横須賀は、ミサイル防衛の拠点としての姿を整えることになる。

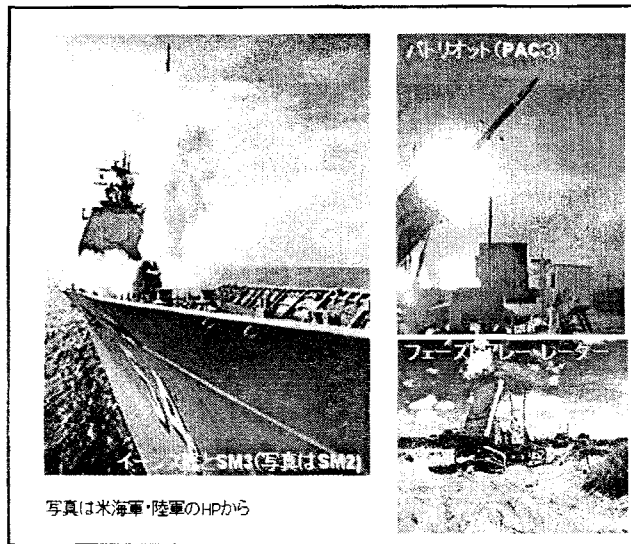
主戦場は日本海だ。「ピースデポ」は、米国情報公開制度を活用して入手した横須賀配備のイージス艦の航海日誌を分析し、これらが北海道・奥尻島西方150~230キロに設定された「ミサイル防衛作戦区域」への航行を繰り返していることを突き止め、発表した。同区域は、北朝鮮から米本土を目標にして弾道ミサイルが発射された場合の軌道下に近い(詳しくは『核兵器・核実験モニター』No.239、8月1日)。

昨年秋以来、日本海沿岸の各地にはイージス艦の入港があいついでいる。「レイクエリー」が新潟(2004年10月11日)、「ピンセンス」が小樽(2005年2月5日)、「フィッツジェラルド」が舞鶴(2月10日)。この動きも「ミサイル防衛作戦区域」と並べてみれば合点がいく。レイクエリーの新潟入港を報じた新聞記事は、「MD任務海域の近くに緊急避難や補給・休養ができる港があるのが望ましい」、「食糧や燃料の補給に太平洋側から別の艦船を回すのは効率的でない」さらに「ほかの日本海側の港にも寄港したい」との米軍関係者の発言を紹介している。

供与する」ことを「武器輸出三原則」の禁止条項から除外することを決めた。

そして、2004年12月10日、新「防衛大綱」と同時に発表された内閣官房長官談話には、「(日米が) 共同で開発・生産を行うこととなった場合には、厳格な管理を行う前提で武器輸出三原則等によらない」として、MD関連の対米武器輸出は、三原則の枠外とされることが決められた。この発表から間もない12月19日の「日米安全保障協議委員会」(SCC) では、日米共同技術研究を「共同開発の可能性を視野に入れて前進させること」が「再確認」された。

## 日本のミサイル防衛(2): 米システムの購入

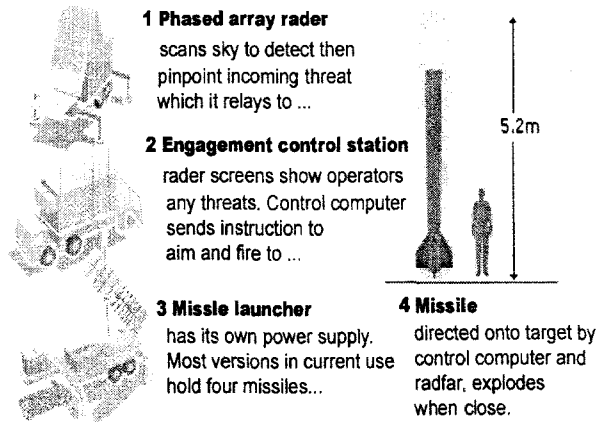


米国との共同技術研究を進めながら、日本政府は米国製のシステムを導入するという「二重投資」を行っている。2003年12月19日の閣議決定「弾道ミサイル防衛システムの整備等について」は、「イージスBMDシステムとパトリオット(パトリオット) PAC-3による多層防衛システム」を整備する、として主要装備を米国から導入することを決めた。

「イージスBMDシステム」

の主要装備である迎撃体(ミサイル)は海上自衛隊のイージス護衛艦に搭載されるSM-3ミサイルである。が信頼性には疑いが持たれている。もう一方の改良型パトリオット(PAC-3)は、もっとも進んだ信頼性の高いシステムといわれるが、2002年に行われた、七基の迎撃体(PAC-3)で五基のミサイルを迎撃する実験では、期待どおりに目標を撃墜したPAC-3はわずか二基。三基は目標捕捉ができず発射すらされなかった。

### Fact file: Patriot missile defense (BBC News UK EDITION)



## 自衛隊法も改定 拡大する「現場判断」

配備を進める一方で政府が着手したのが、MD運用の手続きを簡素化するための法的枠組みの整備である。従来の自衛隊法では、首相が迎撃命令を発するためには閣議と安全保障会議による自衛隊への「防衛出動」決定が必要である。しかし、仮に北朝鮮の弾道ミサイルが発射されれば、約10分で日本に着弾する。このような手続きを踏んでいる暇などない、「兆候」を把握した段階で行動を起こさねば迎撃などできない、という議論が起こることはむしろ当然であろう。

2005年7月22日、これに対処するための改正自衛隊法が参議院で可決、成立した。そこでは、弾道ミサイルへの対処を、①弾道ミサイルが飛来する兆候がある場合は、首相の承認を得て防衛庁長官が迎撃を指示する、②他国による攻撃宣言など明確な兆候がつかめないまま緊急の事態が起こった場合は、防衛庁長官は首相の承認を得なくても、事前に作成した「緊急対処要領」に基づいて迎撃を命じることができるとした。同要領は、期間を定めて部隊を待機させて急な発射に備え、発射されれば現場指揮官の判断で迎撃できるとするものである。これは「シベリアンコントロール」を危うくするだけでなく、「専守防衛政策」の放棄を「現場の判断に下ろす」という、「脱憲法」的立法である。

## 守られざる地域

一方、PAC-3の配備については、次のような問題もある。PAC-3の防御範囲はたかだか半径数10キロである。例えば自衛隊改定案でいう「兆候」が把握された場合、それをいち早く「機動的に移動、展開」(大野防衛庁長官)しなければならないが、その時に発射台を設置する場所として民有地などを借り上げなければならない。しかし、政府の改定案にはそのための用地確保の条項がない。そもそも、いかに「機動的に移動」可能なシステムといえ、分を争う緊急時に移動するなどおよそ現実的ではない。したがって、PAC-3が「防衛」できるのは、日常的に配備されている自衛隊駐屯地の近傍の住民だけである。現在、全国に航空自衛隊の高射群が六個あるが、このうち三高射群にPAC-3を配備するのが政府の計画である。しかし具体的に場所まで特定されているのは、首都圏の第1高射群(習志野、入間、武山、霞ヶ浦の高射隊から構成)だけである。他の二高射群は、どこになるのかは、まったく決まっていない。

近い将来、「有力政治家」が暗躍するPAC-3の「選挙区への誘致合戦」が始まるのではないかと。「PAC-3の傘」で守られるのは、仮にそれが完全に信頼できるシステムであったとしても、首都圏をはじめとして配備予定のつ三つの高射砲群の近くの住民でしかない。

どこをとっても「良いこと」などないミサイル防衛。「郵政民営化」騒動の影で、日本を憲法平和原則からいっそう引き離していく政策が、選挙の争点にもされずに私たちの税金を使ってやられようとしているのだ。ロシアは、すでにミサイル防衛を突破する弾道ミサイルの開発に着手している。

(たまき かずひこ)



ビデオ

# 「基地と住民の70年

— 1936年～2005年 —

## 米軍再編と神奈川の基地



を創りながら考えたこと

# — 戦後60年の年に —

(下)

木元茂夫

(すべての基地にノーを・ファイト神奈川)

### ■海軍の毒ガス研究は平塚から始まった

旧海軍の毒ガス研究について、平塚市のホームページには「旧相模海軍工廠化学実験部」と題して、次のような説明がある。

「第一次世界大戦後、日本は化学兵器の調査研究と技術開発に着手します。当初は陸軍でのみ実施されましたが、大正11(1922)年艦政本部に担当部署が設置され、翌年、海軍技術研究所となり海軍でも本格的な化学兵器の研究

と技術開発が始まります。

海軍の化学兵器は、防毒兵器・発煙剤・焼夷剤・艦船用消化剤・防空気球・特薬など多岐にわたります。こうした兵器の中でも、特薬といわれたガス兵器は、催涙剤・くしゃみ剤・ただれ剤・致死剤の1～4号特薬として知られ、必要に応じ、艦砲用弾丸に充てんできるよう計画されたといわれます。

From Daily Updating  
POLITICAL CARTOONS

## UN-AMERICAN

「非国民」

by David FITZSIMMONS  
Arizona Daily Star, Tucson

The following UN-AMERICAN activities will soon be AGAINST THE LAW:



「次の行為はまもなく法に抵触することになります」との表示、その下には具体的に五つの行為が描かれている。

- ①国旗を燃やすこと
- ②故意に音をはずして国歌を歌うこと
- ③政治家(サル)のものまねをすること
- ④わざとらしく声の調子を変えて宣誓を行うこと
- ⑤他人に言いふらすことを意図してアイデアを占有すること

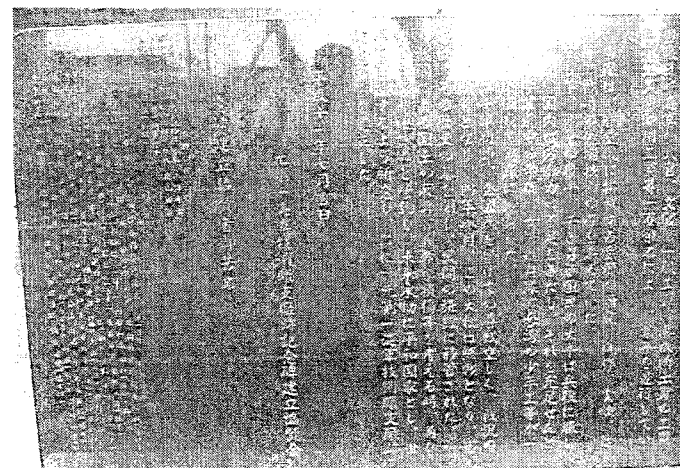
この国での学校現場への「日の丸・君が代」強制といい、そしてかの国での「国家忠誠法」といい、あまりに幼稚で、ばかばかしくて話になりません。だいたい権威のない奴ほど権力的で、自分の意のままに他者を支配しようとするんですよ。

## ■ 歴 史 ■

昭和5年(1930年)海軍火薬廠用地の一部割愛を受けて、海軍科学研究部化学兵器研究室が平塚出張所を開設/1933年平塚出張所に一号・二号・三号特薬兵器の製造実験工場を建設/1934年4月海軍技術研究所化学研究部として独立/1937年特薬庫、火薬庫、爆発円筒及び特殊化兵研究室などを建設。総敷地面積は124,000平方メートルに/1942年相模海軍工廠(寒川町)の新設と同時に、化学研究部が相模海軍工廠化学実験部になる/1945年終戦廃廠、自治体のホームページに旧軍の施設についてこれだけ詳しい解説があるのはめずらしい。

平塚海軍共済組合病院の眼科部長であった藤枝静男さんが1949年に書いた「イペリット眼」という小説があることを「神奈川新聞」の記事で知り、図書館で探して読んでみた。

「昭和十九年十月中旬のある雨の降る午後のことであった。A海軍火薬廠付



海軍第一技術廠支廠碑

属病院の眼科主任・島村章は技研の原口大尉に電話口呼び出された。『うちの宮田二等工員ですな。あれは眼科の方で要休となっておりますが、実は詐病でした。本人が自白したからお知らせします』相手はつけつけした調子で云うなり、返事をまたずガチャリと電話を切ってしまった。…正当な診断書が無視されるとか、工員が青年将校のピント一つで自白するとかいうことは、何も章が青くなるほど例外的な事件ではない。それは、権力に無縁な医員全部がしばしば経験し、よく承知していることであった。だがやはり、その都度彼らは一日中やり切れない憤懣と恥辱を頭につめて過ごさざるを得ないのであった…」

という書き出しではじまるこの小説には、イペリットの製造工程で働いていた工員が、それも十代の工員が次第に身体を蝕まれ、治療を受ける権利すら剥奪されていく過程が、克明に描かれている。

敗戦から数年後に、この小説が書かれたことを知って、いささかの衝撃を覚えた。私の記憶では、旧日本軍の毒ガス戦の実態が明らかにされたのは1984年、中国と韓国が日本の歴史教科書の記述に抗議した最初の教科書問題から二年後のことだった。歴史学者の粟屋憲太

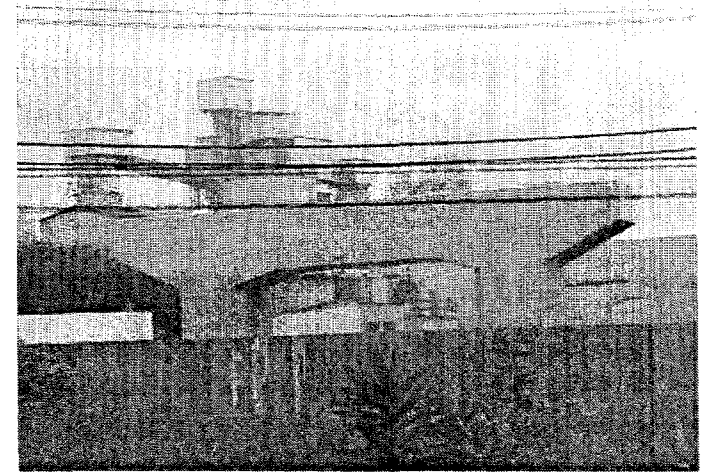
郎さんがアメリカの国立公文書で陸軍習志野学校作成の「支那事変ニ於ケル化学戦例集」を発見し、その存在を公表してからであった。

この「戦例集」は相模原市にある陸軍相模造兵廠—現在の米陸軍相模総合補給廠—で米軍が発見し押収したものであった。「戦争が終わって40年近くが経ってから、戦争の

実態が明らかになる。実際に毒ガス戦にたずさわった兵士は数多くいただろうに、そうした人々は何故、口を開かなかったのか」、当時、そう感じたことをいまでもよく覚えている。「我、かく戦えり」式の戦記はそれまでも数多くあり、その中には戦争の悲惨さをしっかり訴えているものもあった。

教科書問題は戦後派世代にとっても、戦中派世代にとっても、それぞれの意味で衝撃であった。そして、戦後40年という年は日本の戦後史にとってひとつの転機だったと私は思う。敗戦を20歳で迎えた青年が職場で定年を向かえ退職する時期であった。それはさまざまな人間関係に縛られて口を閉ざしてきた元兵士が、重い口を開く時期であったのである。そして、多くの証言が積み上げられていった。

しかし、藤枝さんは戦後4年でこの小説を書いている。旧海軍関係者との軋轢を覚悟のうえでの勇気ある告発であったと言えよう。戦争末期に体験した屈辱と



相模海軍工廠跡地

無力感は、自らに沈黙を許さなかったのであろう。

相模海軍工廠では山梨県の日川中学、静岡県豆陽中学などの中学生がイペリット爆弾の製造をやらされていた。「一日五初の割り当てで爆弾を作った。どの筒もくさく、イペリットが漏れているものもあり、知らずに手にべっとり付いた時は困った。すぐに入口においてある中和剤の晒粉液で洗う。小用、食事の時も必ず手を洗う。忘れて寮に帰って石鹸で洗っても、一晩中ひりひりと痛んだ」と戦後、記している。旧相模海軍工廠毒ガス障害者の会と神奈川県衛生部保険予防課が発行した『旧相模海軍工廠—ガス障害者証言集』には、悲惨な体験談が収められている。一方、工廠の幹部が中心になって発行した『相模海軍工廠』には、「なにぶん化学兵器の研究製造をしていた工廠のことであるから、万が一にも戦犯として裁判にかけられるような人を出しては大変と考え、…専ら戦犯防止対策に全力を尽くすことにした。しかし実際に米

軍が来てみると、調査は、ソ連にあると伝えられていたウィルスを濾過するマスクについての資料あさりに集中されていて、他のことには殆ど触れず、誰も何の咎めも受けなかった」とある。自分たちが戦犯にならなければあとはどうなって

も良いのか、イペリットで気管支や肺をやられた人々は、その障害を負って戦後生きなければならなかったのである。軍人はともかく、徴用工であった人々に、国の救済の手が伸べられたのは、わずか6年前のことである。

## ■ 六浦荘仮駅と池子弾薬庫

京浜急行の六浦駅は、戦争中は現在よりも500メートルほど神武寺寄りにあったことをつい最近知った。駅名も当時は「六浦荘仮駅」で、池子弾薬庫の端—横浜横須賀道路で分断されている「飛地」にあった。1943年2月15日の開設で、海軍関係者専用の駅であった。

逗子市発行の『池子の森—池子弾薬庫返還運動の記録』(1993年)によれば、「横浜市の六浦区域は1942年に民有地を買収し、横須賀海軍航空部第2工廠造兵部が「谷戸田注填場」として使用した。戦時中はそこで毒ガスのイペリットを砲弾に充填していたので、敗戦後もしばらくの間

は臭ったという」と書かれている。

この記述のうち、横須賀海軍航空部第2工廠造兵部という組織名はおそらく誤りで、第二海軍航空廠が正しいと思われる。海軍の航空機関係の組織は改変が何度も行われているが、時代を追って記せば、■1932年海軍航空廠を横須賀に設立(この時点では、航空廠は横須賀にのみあった。横須賀海軍工廠にあった航空機実験部、航空発動機実験部、造兵部飛行機工場は航空廠に吸収された)→■1940年海軍航空廠を海軍航空技術廠と改称→■1941年海軍航空廠令を制定。戦争の拡大に対応して全国各地に航空廠を設置することが決定された。これらの航空廠との混同を防ぐために、海軍航空技術廠は海軍第一技術廠と改称し航空機本体の研究を、支廠を横浜市金沢区に建設し、ここが航空兵器の開発と製造を担当した。

新たに設置された航空廠は、第一海軍航空廠(茨城県霞ヶ浦)、第二海軍航空廠(千葉県木更津)、第



池子住宅と運動公園

十一海軍航空廠(広島県広、大分県)、第二十一海軍航空廠(長崎県大村)、第五十一海軍航空廠(朝鮮鎮海)第六十一海軍航空廠(台湾高雄)である。「木更津にあった組織が、どうして池子を管轄するんだ」という疑問が、なかなか解決しなかったのだが、旧海軍関係者がまとめた『日本海軍航空史』(1969年)を読んで、ようやく納得がいった。

第二海軍航空廠は、神奈川県、千葉県、静岡県、愛知県、三重県、そして硫黄島にまたがる膨大な組織で、県内では、横須賀、平塚、厚木、瀬谷の4つの補給工場が置かれていた。これに池子爆弾庫、瀬谷爆弾庫が加わる(『日本海軍航空史』では弾薬庫ではなく爆弾庫という呼称を使っている)。池子は「隧道式爆弾魚雷庫」で「当時のいかなる爆弾にも耐えるものであった」、瀬谷爆弾庫は「誘爆を防ぐため広大な地域に遠隔分散式としたものである」。

そして、横須賀補給工場はどこにあったのかというと、現在の逗子市沼間(戦争中は横須賀市)から横須賀市田浦、船越にかけての丘陵地帯にあった。現在の横須賀市田浦配水場から池の谷戸公園のあたりである。これは横須賀市の『横須賀市と基地』で確認することができた。

どのような業務をやっていたのかはよくわからないのだが、逗子市が戦後50年を期してまとめた『戦時下逗子の朝鮮人労働者』には貴重な証言がある。「逗子に



田浦配水場坑道入口

は、沼間の山奥にトンネルを掘る海軍工廠の仕事で班全員で来ました。70人くらいいたと思います。その内40~50人くらいは徴用でした。…昔からある沼間の道路で、横須賀線をまたぐ少し手前にポンプ場と呼んでいた所があって、そこを1キロぐらい奥に入った所です。そこにトンネルの坑口が八つくらいあるはずですが、1942年のことだったという。つまり、この逗子市沼間の地下壕掘りと、池子弾薬庫谷戸田注填場の建設は同時期に行われているのである。ここからは私の推測に過ぎないのだが、沼間の地下にも弾薬庫を作ろうとしていたのではないかと思われるのである。少し掘り進めば田浦に出る、池子よりもはるかに軍港に近いのである。しかし、工事は完成しなかったようである。

米軍の調査によれば敗戦時の池子弾薬庫の貯蔵量は約4万トンであったという。『池子の森』には「弾薬庫の総貯蔵量はTNT火薬に換算して15万~20万トン」とあるから、ずいぶん少ない気がする。陸

軍の田奈弾薬庫が本土決戦に備えて、弾薬庫からあふれるほど弾薬を貯蔵していたのとは、大きな差がある。何故か、1945年2月には日本海軍はすでに「矢折れ刀尽きた」状態にあったからかも知れない。しかし、もう一つ、海軍の火薬製造には大きなボトルネックがあったのである。原材料の不足と製造工程での排水による公害問題である。軍部の力がいかに絶対的なものであった時代でも、排水で農業や漁業の基盤を破壊された住民を黙らせることはできなかったのである。

池子弹薬庫の金沢区部分では測量が行

われ、米軍住宅の建設計画が民間企業の手で検討されている。

しかし、横浜市民である私たちに、弾薬庫の現状が説明されたことは一度もない。現在は米軍が使用しているのかいないのか、弾薬庫の構造はどのようになっているのか、廃棄処理は完全になされたのか、土壌汚染、水質汚染はないのか、横浜市はこうした疑問に答える義務がある。

戦後60年、戦争が残した負の遺産は今もさまざまな問題を引き起こしており、決して過去の問題ではないのである。

(きもと しげお)



北の方向へ偵察をくりかえす嘉手納基地のEP3電子偵察機 (リムピース提供)

### 夏に想う

8月の暑い夏も、月遅れのお盆あたりから季節的には残暑という実感にだんだん近づいていきます。私にとって、毎月4日の署名提出行動が、そうした季節の移ろいを実感させてくれたのですが、去年の9月9日からは、防衛施設庁前の平日毎夕方の座り込み行動に変わっています。最近では、どんなに昼間が暑くても、6時を過ぎて夕闇が近づくに連れて涼しい風が吹いてくるのです。

去年の9月9日の夕方から夜にかけて、かなり激しい雨が降っていました。その日私は、辺野古で海上ボーリング調査が強行開始されたということで、防衛施設庁前の緊急抗議行動に参加し、その後普天間基地の大型ヘリ墜落事故後、伊波宜野湾市長を迎えての首都圏で初めての集会に参加し、更に青山で西表の石垣金星さんが参加する辺野古も含めた沖縄の自然保護集会へとトリプル行動で飛び回ったのがつい昨日のように思い起こされます。

その一方で、この8月は、読者の皆さんにとっても広島、長崎、そして敗戦記念日と戦後60年という年月の重みを感じながら、過去の侵略戦争の

反省と未来への平和への誓いを新たにしている日々を送ったことでしょう。かく言う私も、その流れの中で日本と沖縄、そしてアジア太平洋の歴史と今日、そして未来を想い、行動に参加してきました。最初に、広島からの報告です。

### 8月の広島からの報告

私の所属している新産別運転者労働組合中央本部が、フォーラム平和・人権・環境(平和フォーラム)に正式加入したのは三年前でした。そして、参加組合は、常任幹事を出すということで、東京地本の書記長をしている私にそのお鉢が回ってきました。

沖縄の独立運動をしているんだったら、平和フォーラムに関わることで、プラスになることがあるだろうという委員長の粋な配慮によるもので、喜んで引き受けさせてもらったのです。

それから毎年8月になると、原水禁大会への参加が可能になったのですが、財政的にも人的にも余裕がないために、一年毎に広島と長崎大会交互に参加してきました。

そして今年は、曜日の関係で、6日の広島大会

## I WANT YOU FOR U.S. ARMY. イラクで学費を稼がない?



アメリカ陸軍のリクルート・センターの前を二人の青年が通り過ぎる。一人が「入隊志願者は下降線らしいぜ」と言うと、壁に貼られた新兵募集のポスターからにゅっと手が伸びる。「お前が欲しい！」

戦争のない時の軍隊ならともかく、戦地に送られて死ぬかもしれないこの時期に、しかも「正義」の見えない戦争のために、誰も好んで軍隊に入ろうなんて考えません。

でも、聞くところによれば、昨今イラクに派兵されるアメリカ人の多くは「ブア、ホワイト」と呼ばれる人達やヒスパニック系とか、本当？

戦争ってフェアじゃないよね。

by Jeff PARKER  
Florida, 06.22.2005

From Daily Updating  
POLITICAL CARTOONS

最終日にまとめ集会に参加してから長崎大会に7日から9日まで参加するという計画を立てることができたのです。まず8月5日、書記局の仕事を終えてから生まれて初めて夜行特急寝台に乗り広島に行きました。昔、沖縄と東京を往き来する時は、国鉄の電気と蒸気機関車の硬い椅子席で、二泊三日の旅をして、一泊の沖縄船便と合わせて三泊四日が安い旅行方法でした。

今回も宿泊代を浮かすために東京駅から姫路まで夜行特急、姫路から広島が新幹線というコースをとったのです。お陰でその朝、50分ほどの乗り継ぎ時間を利用して姫路城を初めて一周することが出来ました。

そして、朝8時15分、平和公園に向かう市電の中で、運転手の指示で黙祷をし、被爆60年の広島行動が始まりました。その後、原爆ドームの前であった古い友人から「栗原貞子さん」の遺稿展のことを聞き、原水禁広島大会のまとめ集会の後で行って見ることにしました。実は、その名前を聞いた時に、原爆乙女のサダコさんと間違ったり、続いては栗原新社会党委員長の親戚などと訊いて、その友人から呆れられ、今年の春92歳で亡くなった凄いなと教えてもらったのです。

### 栗原貞子さんの遺稿展を見て

会場の市民交流プラザは平和公園から歩いて10分ほどの距離にあり、思ったより小さなスペースで栗原さんの手書き原稿、写真、年表や本などが置かれていました。そこで、1987年に光州事件7周年ということで、彼女が詠んだ「愛と怒りの季節」という詩に感動し、泣きながら書き写してきました。

その詩は「かつて日本にもあった愛と怒りの季節。広場を埋めた何十万の民衆、燃え上がる火炎瓶。炎と黒煙に包まれた警察自動車、催涙ガスがたちこめると後方にひき返し、ガスが薄れると再び紺色の軍団のヘルメットに向かって前進するシュプレヒコール 湧きあがる抵抗のうた。

かつて日本にもあった愛と怒りの季節。

人々の胸腔に充満した愛と怒りはどこへ行ったのだろう。飽食のけだるい体ですべてを受け流し、波立つ心を失ってしまったのだろうか。三百万の血を流し五千万を殺しつくして得たものは時

間の中で漂白され再び日の丸、君が代を強制されて元の地点に戻されようとしている。

かつて日本にもあった愛と怒りの季節。今は目も口もないのっぺらぼうの中流意識のクローン人間。老いたかつての神様がよたよたと自衛隊のヘリコプターから火の島へ降臨し、動員された小学生が日の丸の旗を振っている。

海峡一つへだてた国の燃える六月。かつて一斉の蜂起して日本軍に捕らえられ虐殺されたパゴタ公園。七年前に血塗られた光州では息子を殺された老いた母が石を投げてひるまない。海峡一つへだてた国からきこえてくるつなみのようなうたごえが愛と怒りを失った空っぽの胸腔に炎の季節をよみがえらせる。」で結ばれるのです。

この詩から18年後の日本の現実に対して、栗原さんの愛と怒りはどれ程強いものだったかを想像し、悔し涙を止められなかったのです。今年の広島で出会ったすばらしい人でした。

### 8月の長崎を訪れて

そして、翌7日長崎へ行きました。連合、原水禁、核禁会議三者の統一集会で、被爆者の下平作江さんの証言に過去の出来事というより今の現実が続く愛と怒りの証言に、やはり泣いて感動しました。

8日は午前の分科会から午後の三者によるシンポジウムに参加。その中で、参議院の郵政法案の否決が伝わりました。会場は一瞬騒然状態、9月11日の米国同時多発テロの4周年の日に小泉首相とそれを背後で操る米国ブッシュの計画的な解散総選挙となることに怒りを新たにしました。

その後、浦上天主堂から念願だった永井隆さんの「如己堂と記念館」を訪ねました。

というのは、今年に入ってから、糸数慶子さんと大田昌秀さんの講演で、都合三回、永井博士の二人の子どもへの遺言という文章の朗読を聞かされ、どんな人なのかとすごく気にかかっていたからです。

### 永井隆博士の遺稿から

そこで永井隆博士の人生を始めて知ることが出来ました。長崎医大で放射線医学研究と臨床医学に携わり、被爆前にレントゲン直接診断などに

よって白血病になり、余命3年と宣告された後、研究室で被爆したのです。そして、自らも被爆、重傷を負いながらも医者として治療や原爆被害の臨床研究などに従事し、43歳で亡くなるまで目一杯以上に生き尽した人生の凄さに、自分の今までの人生と今後の生き方に衝撃が走りました。そして「長崎の鐘」と「いとし子よ」の二冊を買い求め、移動の途中、ホテルに帰ってから、食事しながら、帰りの新幹線で一気に読み終わりました。糸数さんや大田さんが朗読されていた文章は、「いとし子よ」の中での「鳩と狼」にありました。その一部を紹介します。「日本国憲法について、どんなことがあっても戦争をしないと決めた憲法を履行しなければいけない。(略)これを破ろうとする力を防がねばならぬ(略)如何にももっともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない。その時こそ、…誠一よ、カヤノよ、たとい最後の二人になっても、どんなのしりや暴力を受けても、きっぱりと『戦争絶対反対』を叫び続け、叫び通しておくれ！たとい卑怯者とさげすまれ、裏切り者とたたかれても『戦争絶対反対』の叫びを守っておくれ！(略)愛されるものは滅ぼされないのだよ。愛で国を固め、愛で人類が手を握ってこそ、平和で美しい世界が生まれてくるのだよ。いとし子よ。敵も愛しなさい。愛し、愛し、愛しぬいて、こちらを憎む隙がないほど愛しなさい。愛すれば愛される。愛されたら、滅ぼされない。愛の世界に敵はない。敵がなければ戦争も起こらないのだよ。」この本は、1949年からなくなる1951年5月1日に原爆症と白血病で亡くなる文字通り闘病生活の中で書かれたものです。にもかかわらず、まさに今の日本の政治状況に対して警鐘を鳴らし、私たちの心構えを力強く励ましてくれるもので、糸数さん大田さんが読み上げたくなる気持ちが良く分かりました。こんな凄いなにめぐり合えた今年の長崎は、感謝し切れないほどの喜びに満たされました。

### 15日の敗戦記念日の出会い

そして、15日の敗戦記念日には、千鳥が淵で行われた平和フォーラム主催の集会に参加しました。戦後60年ということで、靖国神社へは、恒例になった議員などの参拝に留まらず、最近になく

多くの人々が参拝に来たそうです。それにしても右翼と警察機動隊の暴力的弾圧が酷かったようです。

靖国神社への非暴力の抗議、プラカードを持つことすら許さず、一方的に暴力的規制をして怪我を負わせてだけでなく、6人も逮捕したのです。それが、新聞発表では、一部の過激派が逮捕されたとすりかえられてしまったのは、断じて許せません。

そうしたひどい弾圧状況にあった靖国、千鳥が淵周辺でのちょっとした出会いと驚きの話を紹介します。平和フォーラムの集会后千鳥が淵公園のベンチでかみさん手作りの玄米弁当を食べていたところ、元日本兵らしいお年寄りが、少し離れた隣に座り、お弁当を食べ始めたのです。

食仲間が出来てこれ幸いということで話しかけると、やはり元海軍で南方戦線を転戦していた方でした。敗戦の時には有名なラバウル島にいたそうですが、その時に何人ぐらい日本兵がいたか分かりませんが、と彼が質問をしてきたのです。その質問の仕方からいって、多分一般的な予想よりも多かったのだろうと思いながら「一、二万人ぐらいですか」と私は答えました。

彼の応えは、「二〇万人でした」という驚くべき数字で、但し武器は日露戦争時代の旧式の歩兵銃しかなくアメリカ軍の機関銃とは戦闘できるものではなかったということです。そして、どんな生活をしていたかといえば、沖縄と同じで海の魚介類と様々な芋類を自分たちで栽培していたそうです。

太平洋の島々で戦われた日米両軍の死闘は、南太平洋諸島の島人たちを巻き込みながら最初の前線を取り残す形で北上し、サイパン、フィリピン、硫黄島、そして沖縄へと移っていったわけです。彼の言葉によると、自分は海軍だったから生きて返れた。陸軍はもっと戦死者が多かったということでした。このことから言えるのは、日本の敗戦時に日本軍は、五〇〇万人も本土防衛の戦力を保っていた、という記憶があながち間違いではなかったということです。

### 8月15日の集會

その千鳥が淵から二箇所集会をはしごしまし

た。最初は、反天連系の市民運動、例年右翼の集中的な妨害を撥ね退けて頑張って集会和デモを貫徹しているところ。二番目が、喜納昌吉さんが呼びかけたシンポジウムです。そこでは、カナダ人ジャーナリストのベンジャミン・フルフォードさんの意見が刺激的だったので、「日本がアルゼンチンタンゴを踊る日」と「泥棒国家の完成」の二冊を買って今読んでいます。

また、喜納さんが2009年、国連のアジア本部を沖縄に誘致し、国境からの独立を目指すという展望を語ってくれたのは、まさに今年に入ってから私が言っていることと同じで、やはり歴史の必然的流れが本流となって独立に向かっていると感じました。他のコメンテーターは、法政大学の五十嵐教授、評論家の鈴木邦男、社民党の保坂展人の面々を仕切っていたのが、高野孟インサイダー編集長でした。

## 沖縄の8月

8月の暑い日々の中で、私にとってやはり一番暑くなったのは、沖縄のことでした。

去年の13日の金曜日、米軍普天間基地の大型ヘリCH53D型が沖縄国際大学校内に墜落炎上してから早くも一年を迎えようとしていた時、その沖国大5号館屋上から高さ80メートルのところまで「NO FRY ZONE(飛行禁止区域)」と真赤な大文字のアドバルーンが揚がったのです。大学当局が、軍用機や米軍基地は、民間の航空法が適用されないという米軍に対する国内法免除措置の裏をかいて墜落事故から一年を前にした10日から一週間の予定で上げたのです。

那防衛施設局は直ちに中止要請を文書で大学当局に送り、その後も抗議を続けたということです。全く情けないというか、日本の防衛施設局が誰のための役所なのかを自己暴露したものと言えようがありません。それに対して、宜野湾市民や他の多くの激励を受けて、そのアドバルーンは、予定通り16日まで、普天間基地所属の軍用機の飛行を妨害し続けたのです。そして、意を強くした大学側は、米軍が上空飛行をやめない場合には、更に第二弾の秘策を練っているということです。

また、墜落から一年が経った13日には、基地撤

去を求めて行動してきた「カマドウー子たちの集い」の女性たちが、普天間基地ゲート前に早朝から集まり、金網に黒いリボンを結びつけ、「安全な空を返せ」などとき書いたプラカードを持ち、沖縄の平うこうと言う線香を焚きこめ、お塩をもって普天間基地のお葬式をし、米軍基地を葬り去りたいという祈りを込めたのです。

この行動には、若い沖縄国際大学の学生も加わり、中には涙を浮かべながら祈りをする人もいたということです。

こうした闘いの成果と高揚感の一方で、怒りに熱くなることも沢山ありました。

## 在沖米軍の動きに抗議する

それは、8月15日に起こりました。靖国神社周辺を除いて、日本中が静かに平和への誓いを新たにすべく、集会や祈りをする日に、沖縄金武村のキャンプ・ハンセンで実弾演習が強行されました。それも昨年5月から住民が座り込みを続け、建設に反対をしてきた都市型戦闘訓練施設で実施したのです。その同じ日に、日本の何処でそんな軍隊の暴挙が行われたのでしょうか。何故沖縄では許されるのでしょうか。一ヶ月前に金武村で、稲嶺県知事をはじめ多くの議員や民衆が参加して闘った実弾演習阻止闘争を米軍は元より日本政府はどう受け止めたのか、全くはらわたが煮えくり返るとしか表現しようがありません。

更に、許せないことが次から次へと米軍と日本政府によって起こされました。

前にも書いたと思いますが、沖縄のお盆は琉球暦(旧暦)で行われます。最近では首都圏でも盛んになっているエイサーは、元を正せば、沖縄島中部地域で行われてきた琉球暦のお盆行事なのです。今年は、日本全体が月遅れのお盆を迎える15日直後の17日から19日までがそうでした。

お迎えの日をウンケー、中日をナカピー、

そして、送りの日をウークイと言って、家族、親戚が揃ってご先祖様の霊と一緒にご馳走を食べ、泡盛、オリオンビールを飲み、平和で幸せに暮らせるように祈る日々を送ります。その中で、若者たちのエイサー踊りが各地で夜更けから未明まで続くのです。

ところが、米海兵隊は、その17日に事前通告も

なくキャンプシュワープの辺野古の浜に14台もの水陸両用陸用舟艇を並べ、海に向かって突進し宜野座方面に走り去るという演習を強行しました。

6月初めに沈没事故を起こし、事故原因調査もすることなく引き上げたのが、ほぼ一月前の7月15日だったことから言うと、米軍は私たち沖縄人を対等平等な人間とは思っていないとしか考えられません。また、そうした米軍の暴虐に対する日

うするためには常日頃から訓練が必要だ」と言い、中止は出来ないと言ったのです。まさに、日本政府の役割が、沖縄人の命と暮らしを守るよりも、米軍の軍事能力を落とさないために危険を顧みないで訓練をさせるというものであることを正直に告白したものに他なりません。沖縄中が夏の暑さに加えて更にヒートアップするのは当たり前でしょう。

もう一度更に、ということ報告しなければな



辺野古の座り込み500日(8月31日)

本政府の基本的姿勢が、決して強いものではないと米軍に見透かされているのです。

## 日本政府の動きに抗議する

実際、この時沖縄を訪れていた北原防衛施設庁長官と何故か沖縄にいる外務省の宮本沖繩担当大使の二人が、在沖米軍トップのウエーバー四軍調整官とあっても、なんら影響力を行使するような抗議をしませんでした。そして、あろうことか、北原防衛施設庁長官は、都市型戦闘訓練施設で最も危険な訓練塔からのライフル射撃について、米軍の案内役からの説明を聞いて「米軍が任務を全

りません。読者の皆さんがもういい加減にしてくれという気持ちも分かりますが、そうは行きません。ここまでされると米軍はわざと私たち沖縄人を怒らせるか、敢えて怒らせるような状況を作り出しているのではないかと疑いたくなるのは、私の考えすぎでしょうか。そして、何かを仕組んで沖縄の状況を一気に変える工作をしているのではないかと思いたくなるのです。

というのは、前述した普天間基地での米軍機の訓練飛行が、やはりこの琉球暦のお盆に合わせるようにして、一気に激しさを増したのです。それも宜野湾市や沖縄県の抗議にもかかわらず、夜の

10時、11時過ぎまで夜間飛行を繰り返し、爆音を撒き散らし続けたのです。まるで、前述したアドバルーン作戦に対する報復攻撃のように。

### 怒りを希望に転化するとは

前の項で、私は何回許せないと怒りを表現したか読み直したくなるほど熱くなっています。こうした変わらぬところが悪くなる現実の一方で、今回の小泉解散、総選挙によって、この9月には米軍再編に伴う沖縄米軍基地の削減案が出されるのではという期待も木っ端微塵に消えてしまいました。

そして、9月4日が来ます。10年前に起こった事件に対して、私たちが誓い合った平和で静かな沖縄を取り戻すという決意と続けてきた闘いをどのように自分の中で整理すればいいのか、正直言って情けない気分が陥りそうです。しかし、沈み込むわけには行きません。どんなことがあっても姿勢を正して「愛と怒りの季節」と「怒りと希望の日々」を生きたいと思います。

三年前の6月13日、ヒョスンとミソンの女子中学生が米軍戦車にひき殺され、その秋には犯人の米兵たちが無罪になったことを忘れてはいません。その後の韓国民衆の闘いの凄さに感動しながら、にもかかわらず民族分断状況の悲劇を解決するところまで辿り着く道の困難さを思う時、私た

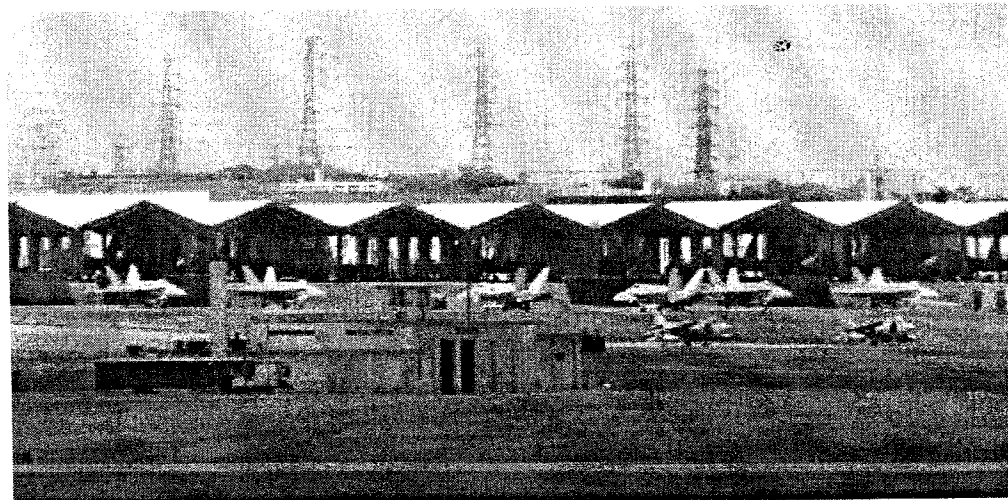
ちにはまだまだやり切れていないことが沢山あると痛感するのです。

だから状況がどんなに厳しくても、怒りと希望を持って闘い続けることが、一步一步勝利の道を切り開くのです。後ろを向いている暇はないと自戒しています。

世界中で愛と怒りを激しく燃やして輝いている人々が大勢いるのですから。そのことが、沖縄での困難な闘いを勝利させている原動力でもあるのですから。ということで、この8月31日には、沖縄の名護で辺野古座り込み勝利、海上基地建設阻止勝利の500日集会とコンサートが開かれます。私たちも、この首都圏で、国会や防衛施設前での多くの勝利を積み重ねてきたことをもって、名護の500日行動と共に防衛施設前での集会とコンサートをします。

また、9月4日には、ちょうど10年、120回目の首相官邸、アメリカ大使館への署名提出をしてから、辺野古実行委員会が呼びかけている防衛施設前の人間包囲行動に参加して行きます。そして、11日、同時多発テロから4年目の日に、小泉・ブッシュたちが仕掛けてきた衆議院選挙の投票日に、小泉自公政権、ブッシュたちの思うままにはさせないぞ、と勝利に向かって、一日一日、共に闘っていきましょう。

(おおた たけじ)



嘉手納基地に、岩国基地から飛来したFA18A機

## オキナワの基地の一ヶ月

2005年7月21日～8月26日

皆川みずゑ 編

#### ●7月21日

超党派の県議団と儀武金武町長らは首相官邸と外務省、防衛庁を訪ね、都市型戦闘訓練施設の訓練即時中止を要請した。これに対し、町村外相は「安全面に配慮するが、訓練の中止を求めるつもりはない」と発言した。

辺野古沖で米海兵隊が起こした水陸両用車の沈没事故で、米軍、那覇防衛施設局、名護漁業協同組合は引き揚げ作業時のさんご礁への被害を調査したところ、3カ所で破損が見つかった。

#### ●7月22日

普天間飛行場の辺野古沖移設を断念させようと「心に届け女たちの声ネットワーク」は那覇市内で「基地は沖縄のどこにもつくらせない」と訴える道ジュネーをした。約150人の女性が参加した。

#### ●7月25日

稲嶺県知事は防衛庁に大野長官を訪ね、都市型戦闘訓練施設の暫定使用禁止を要請した。これに対し長官は「訓練中止を（米軍に）求めることはできない」と述べ、要請を拒否した。続いて面談した細田官房長官は稲嶺氏らに対し「代替施設への移設を急ぐ」と述べ、訓練中止を米側に要求することは拒否した。

#### ●7月26日

衆院本会議で小泉首相は都市型戦闘訓練施設について「移設完了までの間、米軍が必要不可欠な訓練を実施するにあたり、安全、環境に十分配慮するよう求めていく」と述べ、現在の実弾射撃訓練を容認する姿勢を示した。

#### ●7月27日

伊波宜野湾市長は県庁の花城知事公室長を訪ね、訪米の要請行動を報告し「基地負担軽減のためにも知事が先頭に立ち要請行動を展開してほしい」と要望した。

#### ●8月3日

沖縄県内の米軍用地は04年3月末で国有地が7795.2ヘクタール、私有地が7786.4ヘクタールで12年ぶりに国有地の割合が私有地を上回ったことがわかった。また、72年～04年に防衛施設庁が320億3300万円を投じて117.3ヘクタールの私有地を買収したこともわかった。資料を入手した照屋寛徳衆議院議員は「基地の国有化が進むことで、返還後の跡地利用で住民の意思の反映に支障がおきないか心配だ」と述べている。国への軍用地売却は防衛施設庁訓令「提供土地等買収要領」に基づく。「将来、長期にわたり返還の見込みがなく、所有者の経済的事情が逼迫した時」などが条件だ。また、租税特別措置法で所得税、住民税の特別控除がもうけられている。

普天間飛行場の辺野古沖移設に反対する署名活動を、在米沖縄県人たちがインターネットによって始めた。8月末までに1万人が目標。

●8月4日

金武町の米軍都市型戦闘訓練施設で射撃訓練が再開された。7月12、13日以来。

4日付けの米軍準機関紙「星条旗新聞」は、在沖米軍前四軍調整官ブラックマン中將の今年3月15日付けのメモの存在を伝えた。03年に宜野湾市でおきた米海兵隊員らの強盗障害事件（6月に被告米兵の上告棄却）の、今年3月の福岡高裁那覇支部の判決に対して出されたもの。「先例のない粗野な判決で被告に対する偏向を示すものだ」と記されている。判決では、取り調べ中に米軍が被告らの身柄を拘束しなかったことを問題視し、口裏合わせを防止する措置を講じなかったと異例の批判をした。メモは「海兵隊が共犯と受け取られる」判決文だと非難、ラムズフェルド国防長官に対しても「公正な判決をただすために外交チャンネルを通じて行動するよう」進言するとしている。

●8月5日

都市型戦闘訓練施設での実弾射撃訓練の再開で、稲嶺知事はシーファー米駐日大使を訪ね、施設の使用中止を求めた。これに対して大使は「世界的にテロが続く今の状況を考えた場合、どうしてもテロ訓練をしなければならない」と答え、要求を退けた。

●8月6日

米軍の調査資料で、米軍FA18戦闘機にブレーキの構造的な欠陥があり「似通った傾向の緊急事態」が90年から続いていると報告されていることが明らかになった。明らかになった6日正午までに、岩国基地所属のFA18プラス6機が嘉手納基地に相次いで飛来した。7日から13日まで沖縄近海で行われる05空・海合同演習に参加するため。

●8月7日

昨年8月13日の沖国大米軍ヘリ墜落事故から1年を前に「普天間飛行場問題シンポジウム」（主催・宜野湾市、共催・沖国大）が同大でおこなわれ、200人が参加した。伊波市長は「市街地上空を飛び回る『普天間』の運用は、米国では認められない。米国と同じ運用を求め、それができなければ米国に戻ってもらうしかない」と、米国内への移転実現を強調した。

●8月9日

吉山盛安県中小企業団体中央会会長は「県はいつまでも辺野古移設にこだわらず、普天間飛行場の危険除去を最優先とする観点から、政策を転換すべき曲がり角に来ている」と述べた。吉山氏は稲嶺後援会の副会長。県に辺野古見直しを求める理由として「飛行を再開したヘリがいつ事故を起こしてもおかしくない状況が続いている。沖縄の基地負担の象徴となっている普天間飛行場で再び同じ事故が起きれば、沖縄が危険という風評被害を生じさせかねない。観光は安心、安全が第一だ」と述べた。その上で「日本政府の要人の中にも『辺野古移設はない』と言う人もいる。沖縄自体が辺野古移設をあきらめ、その代わり、辺野古ではなく、県外、特に米国領土のグアムなどに移設することを早急にやらしてもらわなければいけない」と述べた。

合同演習で嘉手納基地に約30機の米軍外来機が一時移駐していることをうけ、同基地を抱える三市町でつくる連絡協議会（三連協）や嘉手納町議会は同基地やキャンプ瑞慶覧を訪ね、演習の即時中止などを訴えた。

●8月10日

宜野湾伊波市長は、米軍再編で普天間飛行場の返還が実現できなかった場合「市民生活に著しい影響を与えている米軍の演習は米国防総省の方針に反している。米国防長官を米連邦地裁に訴えることができないか、法的な可能性を検討したい」と述べた。また、市長は「7月の訪米で視察したカリフォルニア州サンディエゴ市の海兵隊ミラマー航空基地は、住民生活に影響を与えないよう飛行ルートを設定し、運用状況を自ら厳しく規定している」「米国防総省は1995年、米軍が海外基地で環境に著しい影響を与えた場合、その危険を除去する義務を負うことを自ら方針にしている。『普天間』の運用状況は国防総省方針に反しており、米軍自身が住宅地上空での飛行をやめなければならないのではない

か」と説明した。

沖国大で、上空を飛行する米軍機への抗議のためアドバルーンがあがった。10日から1週間の予定。アドバルーンは直径2.5メートルで飛行禁止地域と英語で書かれた垂れ幕を下げる。アドバルーンは6階建ての屋上から地上最高60メートルまで揚げられるよう設定した。航空法が適用されると「普天間」は半径4キロ区域で高さ45メートルの制限がかけられる。軍用機に民間の規制はなじまないため、米軍飛行場や米軍機は航空法に基づく規制を受けない。周辺にも諸法令は適用されないため、今回のアドバルーンがあがった。これに対し、那覇防衛施設局は「普天間飛行場の航空機の安全を確保するために掲揚を控えてほしい」と要請した。報道陣の「法的根拠はあるのか」との質問に、施設局職員は「掲揚を控えていただきたいと要請した」とだけ話した。沖国大の黒鳥安武事務局長は「ふだん米軍ヘリは大学周辺を飛んでいるが、今日は別のコースを使っている。しかも通常よりも高い高度で離着陸している。アドバルーンの効果があるのではないかと話した。

平和や人権問題に取り組む米国合同メソジスト教会の「正義と平和」部長のマーク・ハリソンさんが沖縄を訪れた。伊波市長が7月の訪米の際、同教会に沖縄米軍基地の視察を求めたことから実現した。辺野古沖や嘉手納基地などを視察した後、移設計画には「豊かなこの海を破壊することは犯罪だ」と厳しく批判、同教会の全国総会などを通して在沖米軍基地の現状を訴え、米国世論を喚起する考えを示した。同教会は全米第三位の会員をかかえ、政治的な影響力を持つ。ブッシュ大統領のほか、多くの連邦議員も会員という。都市型戦闘訓練施設の訪問の際には監視台に上がり、民間地との距離を確認した後「ばかげている。あまりにも近すぎる。」「米国では考えられない施設だ。なぜ投票で政治を変えないのか」と何度も繰り返した。

●8月11日

那覇防衛施設局は沖国大のアドバルーンをおろすよう要請した根拠について「米軍飛行場については航空法の適用があるわけではない」とした上で、航空機の安全航行を確保する航空法の立法趣旨に基づくものとの認識を示した。一方、在沖米海兵隊は「米連邦航空法に違反している」と指摘、掲揚中止を求める書簡を那覇防衛施設局と県警に送付していたことがわかった。

●8月12日

普天間基地所属で岩国基地に駐機していたCH46E中型輸送ヘリ3機のうち1機に、飛行中警告ランプがつき、3機とも山口宇部空港に緊急着陸した。点検後、異常なしで岩国基地に飛び立った。

●8月13日

沖国大の米軍ヘリ墜落事故から1周年を迎え、大学関係者や市民グループなどが事故への抗議行動や普天間飛行場の危険性を考えるさまざまな取り組みを実施した。

●8月15日

米議会の「海外基地見直し委員会」は、在外米軍再編に関する最終報告書をブッシュ大統領に提出した。沖縄の米海兵隊については、普天間基地所属部隊を嘉手納基地または岩国基地に移転、その他の部隊はすべて「沖縄にとどまるべきだ」とあらためて提案している。伊波宜野湾市長は、この報告書では沖縄の負担軽減には結びつかないとしたうえで、「削減兵力6万7千人という1万人の開きの中に、沖縄の削減分を盛り込む余地がある。あくまで日米の2国間による再編協議によって決まる」と述べた。

●8月16日

嘉手納基地所属のF15戦闘機1機と海兵隊のハリヤー垂直離着陸攻撃機1機が、普天間飛行場に飛来した。また、1年前の墜落機と同型のCH53DやCH46、AH1、嘉手納基地所属のHH60などのヘリも離着陸を繰り返し、宜野湾市内上空は爆音が響きわたった。16日は沖国大のアドバルーン掲揚最終日だった。

嘉手納基地では、海兵隊のAV8Bハリヤー戦闘攻撃機と嘉手納基地所属のF15戦闘機が緊急着陸し

た。いずれも消防車が出動したが、それぞれ自力で駐機場へと戻った。

日本ジャーナリスト会議が発表した05年度JCI賞の市民メディア賞に、辺野古沖で基地移設に反対する市民運動を撮った大島和典さんの作品「辺野古の闘いの記録」が選ばれた。

●8月17日

辺野古のキャンプ・シュワブの浜から、米軍の水陸両用車14台が沖合の海に出動した。6月9日に辺野古沖で1台が沈没事故をおこして以来、初めて。

沖縄を訪問している北原巖防衛施設庁長官は、金武町の米軍都市型戦闘訓練施設を視察したあと、地元住民が最も懸念している訓練塔からのライフル射撃について、中止させることは極めて困難との認識を示した。この時、米軍側は射程距離約1100メートルのM24ライフル（口径7.62ミリ）を使用すると説明した。このライフルの最大射程は3700メートルあり、伊芸地区の住宅地域がすっぽりはいる。

フィリピン最大のイスラム反政府勢力、モロ・イスラム解放戦線（MILF）指導者は、米政府や在沖米軍の高官らが沖縄駐留の米海兵隊員の比南部ミンダナオ地方への移駐に協力するよう要請してきたことを明らかにした。MILF幹部に02年末から米軍関係者が接触してきた。米軍が対テロ戦争第2弾としてサンボアンガ市南方沖のバシラン島でアルカイダ系アブサヤフの掃討を名目に半年間実施した米比合同軍事演習「バリカタン02-1」終了後、間もなくという。これ以降、今年6月までに米軍関係者と複数回面談した。米側は（1）在沖米軍の整理・縮小は最優先課題（2）サンボアンガ市の比空軍基地に演習後もローテーションで在沖米兵らが対テロ訓練を名目に駐留中（3）（現在500人規模とされる）移駐米兵の数をミンダナオ地方全体で数千人規模に拡大したい—などを伝えたという。この接触を明らかにした指導者は反執行部派。米側が協力に対する「見返り」を示したことは認めたが、詳細への言及は拒んだ。

●8月18日

米海兵隊のヘイギー総司令官（大将）はワシントン市内の講演で「沖縄にいた3個歩兵大隊がイラクに派遣されてからかなりたつ。海兵隊は駐留場所にかかわらず前方展開し、特定の場所にとどまらない。今後もアジア太平洋地域全体で活動するだろう」と述べた。在沖海兵隊の削減については「現時点では北東アジアにおけるプレゼンス（存在）が必要だ」と述べた。

●8月23日

午後4時ごろ、南風原町新川の沖縄自動車道那覇料金所付近で米海兵隊の大型トラックがUターンを試み、一般の自動車と衝突した。自動車の運転手の男性と米兵2名にけがはなかった。米海兵隊のトラックは金武町のキャンプ・ハンセンを出発し、トラック4台で那覇—許田間の往復を繰り返す訓練をしていた。米兵らは「走行距離を重ね、安全に大型車両をUターンさせることに重点を置いた訓練だ」と説明した。途中で要員を交代し、一日で5往復をすることもあるという。この事故では隊列の最後尾のトラックが3台に続いてUターンを試み、出口から直進してきた自動車と衝突した。日本道路公団沖縄管理事務所によると、米軍から訓練の通知はなかった。事故地点でのUターンは禁止されていないが「危険なので、一般のドライバーには注意するよう呼びかけている」という。米軍車両の通行料金は日本政府が負担している、外務省日米地位協定室は、民間地である沖縄自動車道での訓練についても「施設間移動にあたる。安全には配慮すべきだが、米軍に必要な訓練は施設外でも地位協定上は排除されない」とした。

●8月24日

午前8時20分ごろ、嘉手納町役場に隣接する米軍嘉手納基地で模擬爆発装置からとみられる爆発音が約30回発生、大量の白煙が流れた。米軍は年に数回「即応訓練」と呼ばれる非常事態を想定した訓練を実施している。嘉手納町によると、町役場敷地とフェンスを挟んだ直近の場所で訓練したのは初めて。同基地は21日から24日まで訓練を実施すると発表していた。夜中にサイレンを使用するな

ど騒音被害が深刻なため、嘉手納宮城町長が23日に訓練中止を申し入れたばかりだった。この件について嘉手納基地報道部は同日夕、実施段階で場所が変更され、予定外の地点で訓練が行われたことを明らかにした。午後、抗議に訪れた嘉手納宮城町長に対し、基地第18任務支援群司令官のマックス・カシュバム大佐は住民に迷惑を及ぼしたことをわびた上で、訓練場所を見直す考えを示したが「訓練自体は必要」として中止要請には応じなかった。

23日の沖縄自動車道の米海兵隊の事故に関して、在沖海兵隊は「訓練ではなく、沖縄の道路事情、交通法規、地形などを習熟させるための運転練習」との認識を示し、那覇防衛施設局などの照会に回答した。県の花城順孝知事公室長は「大型車両の運転に習熟するための自動車道での走行は明らかに訓練だ。施設間の移動でもない」「衝突事故も起きており、公道での訓練が危険を伴うものであることが立証され、極めて問題だ。やめるべきだ」と述べた。県は事実関係を詳しく確認した上で、米軍や関係機関に中止を要請する方針。

●8月25日

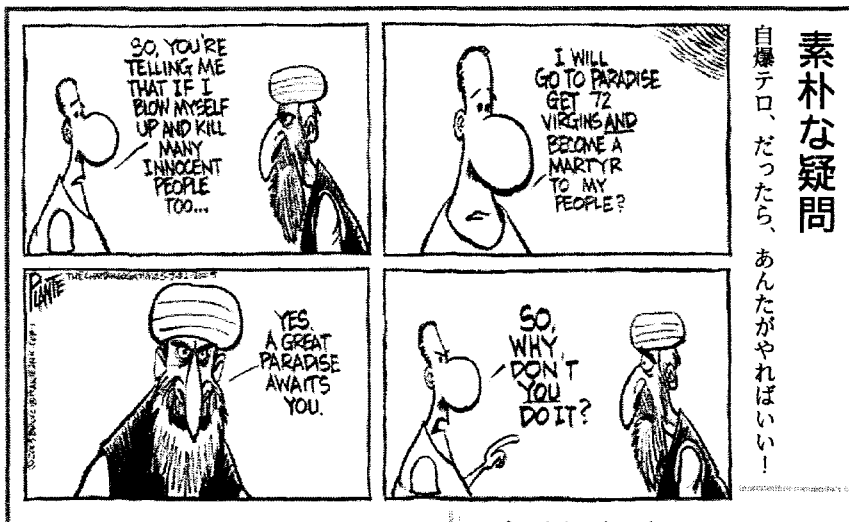
24日朝、嘉手納基地でGBS（地上爆発模擬装置）を使った即応訓練で爆音と白煙が流れ、民間地域に被害を与えた問題で、嘉手納基地第18航空団司令官のジャンマーク・ジュアス准将は嘉手納町役場を訪ね、宮城町長に謝罪した。司令官は実施場所に落ち度があったことを認め「この種の事故は二度とおこさない。今後は訓練の手法を変える」と述べ、謝罪した。また、嘉手納基地報道部は「訓練場所に変更されたのではなく、指示が広範囲で具体的ではなかったのが、現場の兵士が場所決定してしまった」と述べた。一方、被害の照会など具体的な対応を取っていないとして嘉手納町側から不満があがっていた那覇防衛施設局は「被害の申し出がなされた場合、仮に耳鳴りが訓練によるものとの因果関係が専門医により立証されれば、適切に対応したい」とコメントした。夕方の町職労主催の緊急抗議集会には約220人が集まった。宮城町長は激励挨拶で登壇し、今回の事態を受けて嘉手納基地で行われる演習・訓練に対し、町長として初めて中止を求めたことを強調し「米軍が全面的に非を認めて謝罪したのは初めてだ。町民の強い意志が伝わったためだが、現地レベルでは改善の効果は極めて低い」「地位協定の運用改善だけでは、許されない被害がまた襲いかかる。地位協定の全面改定を進める一方で、嘉手納基地の全面返還、譲っても部分的な共同使用協定を実務的な立場で求めていく」と述べた。在日米軍再編協議で浮上する普天間飛行場の嘉手納基地統合案にも触れ「このような運用状態で、絶対に受け入れは容認できるものではない」と述べた。

23日の沖縄自動車道の米海兵隊の事故に関して、那覇防衛施設局の千葉俊之施設部・連絡調整室長は「兵士が新しい所（任地）に行ったら、そういう練習は普通はやるんだろうと思う。目的地に行く道路の曲がり方など、練習した方がいい」と発言した。社民党県連の代表が「施設から施設の移動として、施設外で訓練をしている。基地提供者の皆さんが強い姿勢で臨まないといけない。沖縄は戦場か」などと訓練中止を米軍に促すよう求めた際の発言。この発言に県議らは「軍の車両で秘密裏にこうした訓練を繰り返してきた米軍に対する認識はそのようなものか。そういう甘い考え方だから、同じことが繰り返される」と厳しく批判した。

●8月26日

23日の嘉手納基地の即応訓練について、嘉手納町議会は同訓練を求める抗議決議と意見書の両案を全会一致で可決した。また、8月にはいって激しさを増している騒音被害についても抜本的な改善策と、発生源となっている外来戦闘機の即時退去、今後一切の飛来禁止を求めた同両案も全会一致で可決した。

午後4時35分ごろ、嘉手納基地所属のMC130P特殊作戦機が着陸後、機体を左に傾けながら滑走し、滑走路中央で緊急停止した。タイヤに異常が発生したものとみられる。



素朴な疑問  
自爆テロ、だったら、あなたがやればいい!

From Daily Updating  
POLITICAL CARTOONS

by Bruce PLANTE  
Chattanooga, TN

会計報告 (05. 7. 29 ~ 05. 8. 27)

編集室から

●衆議院の選挙が行われる。米軍の再編は論点にならないとか。でも、東アジアの平和と安定を確立することこそ、構造改革なのに。

●このごろ、沖縄に癒しを求めて、とか、沖縄でいやさされる、とか聞く度に腹立たしくなる。そう宣伝し、隠べいされるもののかに多いことか。



【収 入】

1	先月からの繰越	465,362
2	当期の収入	6,000
	(1)会費収入	
	①維持団体	0
	②維持個人	0
	③参加団体	0
	④参加個人	0
	⑤通信会員	6,000
	(2)カンパ収入	0
	(3)運動収入	0
	(4)預金利子、資料収入	0

【支 出】

1	当期の支出	37,756
	(1)郵送費	30,992
	(2)文具・備品	4,574
	(3)振り込み手数料等	70
	(4)分担金	0
	(5)ロッカー代	0
	(6)雑費	2,120

【残 高】

次月へ繰越	433,606
-------	---------

月刊「キャッチピース」 発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース 編集●キャッチピース編集委員会  
連絡先●232-0065 横浜市港北区高田東3-38-15 田巻一彦方 電話・fax●045-531-1341 tamaki@pw.catv.nc.jp  
郵便振替口座●00160-7-136148 「キャッチピース」 定価●100円 (通信会員年間3,000円)